

深まららない 後始末の議論 誰が核のゴミを見張るのか

当事者意識が低い北電と国任せの自治体

北電の「とまりん館」に展示されている使用済み核燃料プールの写真パネル。取材の過程で保管中の現場を見学できないか北電に打診したが、まだ返事はない。写真のような水中で5年ほど保管した後、金属製のドライキャスクに移して「乾式貯蔵」する方法に関心が集まっている



北電泊原発の運転開始から20数年の歳月が流れ、使用済み核燃料という名の「核のゴミ」が1326体発生した。青森県六ヶ所村の再処理工場は竣工延期がくり返され、国策の核燃料サイクル路線は破綻して久しい。最終処分に向けた見取り図はあるものの、処分地探しは難航することが必至だ。この先、再稼働が認められると更に放射性廃棄物が増え続け、近い将来、原発サイトから溢れだす。原発の運転が停止している今だからこそ、「核のゴミ」問題を直視すべきではないか。本シリーズの第6回は、原発周辺の住民や議員を訪ねて話を聞き、泊村の牧野浩臣村長にインタビューするなかで、使用済み燃料の後始末対策について考えた。

(ルポライター・滝川康治)

原発の運転開始から20数年 深まらぬ核のゴミの認識

「らいでんブランド」のスイカやメロンの産地で知られる、農業を基幹産業にする人口6千余りの後志管内共和町。泊原発から3キロほど離れた18ヘクタールの農地で野菜や米、小麦などを作る藤本修さん(1949年、旧前田村生まれ)は、使用済み核燃料の後始末をこう考えている。「俺は「核のゴミ」を埋めてしまうのは反対だ。地上に置くべきだよ。泊原発を受け入れたのは(泊、共和岩内、神恵内)の4町村であり、金も入った。(大消費地の)札幌だって使用済み燃料を引き受けられないべき。結局、この地域に置くしかないんじゃないのかな」

青年時代から一貫して原発建設に異議を唱え、80年代には原発推進に走る町長のリコール署名(不成立)に奔走した。福島第1原発の過酷事故を機に誕生した町民グループ「原発の安全・安心を求める会(長谷川光彦会長)のメンバーでもある。今年冬、同会は共和町議との懇談

の場を持った。議会の定数は13。泊

原発には賛成・容認の議員が多い。「俺は「原発も使用済み燃料などの」ゴミも同じものなら、建設に賛成した人が引き受けなければいかん。1億円/人で全部、受けたらどうか。自分はオーストラリアに行くから賛成した人は残りなさい」と言った。すると、「あれは危険なんだ」という答えが返った。「国が安全と言うから大丈夫」と言ってきた議員たちから「危険」という言葉を初めて聞いた。勉強不足だと思うね」

と、藤本さんがあきれ顔で話す。泊原発の運転開始から20数年、使用済み燃料の後始末問題に対し、町のリーダーたちの認識は深まっていない様子が窺える。

札幌での地上保管も含め 使用済み燃料に多様な意見

「北海道から食料を送ってもらい、(逆に)ゴミを持つてくるのが中央の考え方ではないか。そうになると、泊原発の核燃料を使った者が管理責任を負わなければなりません」と話すのは、共和町の鳳翔寺(真

宗大谷派)の副住職・中村裕恭さん(1971年、同町生まれ)である。

お寺の境内でチェルノブイリ原発事故に関係した記録映画を上映したり、前出の町民グループの事務局役を担う。3・11後、原発について発言する町民が増え、多くは「いらぬよね」という反応を示す。だが、放射性廃棄物の話になると、「どうするんだらうか?」にとどまってしまう。「当事者の北電職員が真剣に考えていない。我々が考え、もつと声を出さなければ...(中村さん)

同じ会のメンバーだが、藤本さんとは考え方が違う。

「使用済み燃料などは」持ち主が目に見えるところで管理するしかありません。北電本社の地下で管理するか、廃棄物が管理されている場所に本社を移転する——それが議論のスタートになるのではないか。一番大事なのは、危ないものは人間の目の前に置いておくことですよ」

と、本社所在地の札幌での保管も含めた議論の必要性を説く。わたしは、こうした考え方に共感を抱く。



「北電本社の地下で管理することも含めた議論を」と話す共和町の僧侶・中村裕恭さん

泊原発から約10キロ、共和町内の小高い丘に立つチーズ工房とセットになった、ティールーム「ケンブリッジ」を切り盛りする小林芳子さん(1942年、旧満州生まれ)は、夫とともに14年前に東京から移り住んだ。プルサーマルを考える市民グループの世話人でもある。

「廃棄物の問題が片づかないのに原発を再稼働するのはやめてほしい。(原発の事故時には)5キロ圏内に住む人が最初に避難し、ここは後になります。地区の集会所で指示を待ち、バスに乗り込むことになっていくけれど、避難路自体が絵に描いた餅。こうしたことが中途半端なのに、(再稼働で)新しいゴミをつくり、そ

れをどうするんですか」

と、まず身近な課題の解決のほう
が先と指摘する。

「岩内原発問題研究会」代表の斎藤武
一さん（1953年、岩内町生まれ）
は「再稼働そのものが『ゴミの問題』と
強調するが、こども話す。」

「人が嫌がるものを『こ（泊原発）か
ら出せ！』とは言えない。我々があ
きらめ、50～百年間、ここに置いて
おくしかないのでは…」

脱原発を求めて活動してきた人た
ちのなかにも、さまざまな捉え方が
ある。議論は緒についたところだ。

核燃サイクル路線は破綻し 行き場を失う使用済み燃料

泊原発には現在、1～3号機合わ
せて981体（ウラン換算重量で4
00トン）の使用済み核燃料が保管
されており、これは、国内の全保管
量（同約1万7千トン）の2%余りに
相当する。また、イギリスとフラン
スの再処理工場に65体、青森県六ヶ
所村に280体をすでに搬出してお
り、泊原発から発生した使用済み燃
料という名の「核のゴミ」の総量は1
326体になる。先発の本州の原発
に比べ使用済み核燃料の保管量が少

ないものの、再稼働すると厄介な「核
のゴミ」が増え続けていく。

さらに、原発から出る放射性廃液
を濃縮固化したものや、使用済みの
フィルターや樹脂、衣類など低レベ
ル廃棄物の累積保管量はドラム缶換
算で1万343本になっている。

泊1・2号機の使用済み燃料保管
ピットは、3号機のその半分程度
の容量しかない。そのため、合計2
52体の使用済み燃料を1・2号機
から3号機の施設に移すことで、そ
の場をしのいできた。

一方、六ヶ所再処理工場は、ガラ
ス固化体製造施設のトラブルなどで
竣工延期がくり返され、核燃料サイ
クル路線は破綻して久しい。各地の
原発を再稼働させると、使用済み燃
料は行き場を失い、糞詰まり状態を
加速させる。

5月下旬、こうした状況下で使用
済み燃料をどう扱っていくのか、北
電に質問した。先月号の締め切り直
後の6月8日、次の回答が届いた。
「六ヶ所再処理工場が運転開始され
れば、（使用済み燃料を泊から）計画
的に搬出する」

「仮に六ヶ所へ計画どおり搬出でき
ない場合でも、15年程度の貯蔵ス

ペースを確保している」

保管場所があるので当面
は支障ないというもので、将
来の廃炉に伴う廃棄物につ
いては、「放射能レベルに応
じて適切に処理・処分する
こととしている」と素っ気な
い。呑気な話だ。公式見解
を示すしかないのかもしれないが、
まると他人事のよ
うな書き方であった。

では、周辺自治体の担当
者は後始末対策をどう捉え
ているのか――。

「保管スペースにまだ7割程
度の余裕があり、今後の処理
については国が責任を持つ
て方向性を示してもらおうも
の、と考える。高レベル放射
性廃棄物の最終処分問題は、高知県
東洋町の例もあって国も手探り状態。
国の方向性が出ないなかで、我々が
どうこう言えません」

と話すのは岩内町企画・原子力発
電所担当課長の中川馨さん。

東海第2原発を訪れ、使用済み燃
料を金属製の容器（ドライキャスク）
に入れて保管する「乾式貯蔵」の様子
を見学した中川さんは、「思ったより

項のインタビューを参照）。

事業者の北電には当事者意識が薄
く、地元自治体の担当者は国任せと
いうのが実態のようだ。

原発を誘致した者への共感 と世代責任の狭間で苦悩も

「ここで発生した放射性廃棄物は、
国の責任でここで持つ（保管する）べ
きではないか。決して安全なものだ
はないけれど、原発を誘致し、豊か
な財源を享受してきたなか（北電と
安全協定を締結している）岩手4町
村の外には出さないようにする――
という方向で考えたい」

こう話すのは、泊村議会議員の三
浦光博さん（1951年、同村生ま
れ）である。

漁師の家庭に育ち、小樽市内の高
校を卒業後、泊村役場に就職し、幹
部職員になった。原発の誘致で地域
を活性化させようと試みた村の歴史
や、先人の営みを尊重したいという
気持ちが強かった。

しかし、先輩たちが思い描いたよ
うな地域振興ができたのか、村はこ
のままでもいいのかという疑問が募り、
12年前に役場を退職。04年と08年の
村長選に出馬して落選後、11年に村

議になった（現在、2期目）。今は、
三浦さんを含め、村議のなかに脱原
発を公言する人はいない。

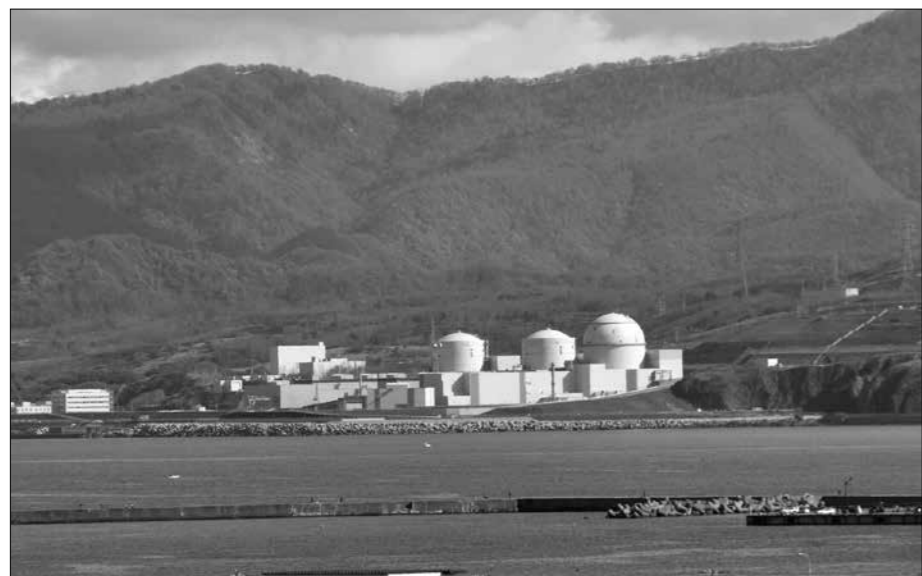
村内での雇用は、原発作業員や村
職員、漁業、郵便局などに限られ
る。基幹産業の漁業は補助金に頼ら
ざるを得ない状況で、後継者はそう
多くない。高齢者の比率も高い。

村の財源の7割を原発
関連の交付金などで賄う
一方で、人口減や1次
産業の衰退などが進む。
『これでいいのか』と考
えていたときに福島第1
原発の事故が起き、環境
が変わった（三浦さん）。

次世代のために限られた
財源を有効に使うことが
原発を誘致した者の責任
と強く思うようになった。

「ゴミの問題は終わりの
ない議論のような気がす
る。国も結論を出せない
難儀な問題に果たして地
域が結論を出せるのだろ
うか。次世代の人たちに
申し訳ない気持ちでいっ
ぱいですね」

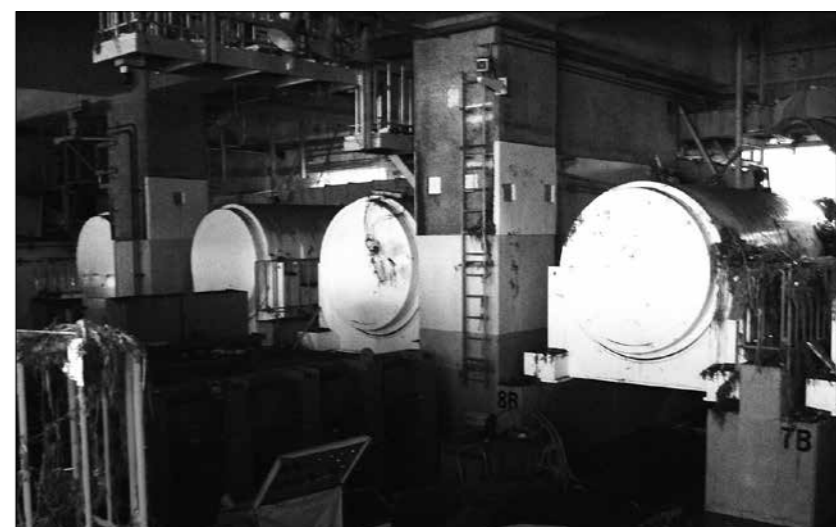
と三浦さんは苦悩する。



岩内町の市街地から望む泊原発

今年4月に日本学術会議がまとめた
「使用済み核燃料は50年間程度、地
上で暫定保管を」「保管施設は原発立
地点以外での建設が望ましい」との
提言をわたしが紹介すると、興味を
示していた。

共和町農協の元参事で岩内町議の
佐藤英行さん（1950年、岩内町



大津波が押し寄せた福島第1原発の使用済み燃料乾式貯蔵施設。中身は無傷だった（東京電力撮影）

簡単な造りになっていることに驚い
た」と言うが、後始末対策は「事業者
の問題」とくり返した。

共和町企画振興課原子力発電係長
の小石川訓さんは、「使用済み燃料に
は詳しくなく、言及できない。『北電
に安全に保管してもらおう』という
感じで、今のところメインになる
話題ではない」と深刻に捉えていな
かった。（牧野浩臣・泊村長の話は別

生まれ）は、「今の時代に造りだした
放射性廃棄物をどうするか、我々の
世代が筋道を立てないと無責任すぎ
る」と考えている。

80年代に岩内原発問題研究会の代
表を務め、今は脱原発派の町議の一
人として論陣を張る。

同研究会の代表だったころ、太平
洋に低レベル廃棄物のドラム缶を海
洋投棄するやり方が批判されていた
が、使用済み核燃料の処理問題には
深く考えが及ばなかった。反対運動
の中心だった岩内郡漁協の関心も、
漁業に対する温排水などの影響が中
心だった時代である。

「3・11を経た今、佐藤さんはこう
言って力を込める。
「廃棄物を増やさないためにも、泊
原発の再稼働をやめさせたい。使用
済み燃料は当分、乾式貯蔵方式を採
用し、多くの人が見られる状態にし
ておくべきです」

泊原発の再稼働に対する道民の関
心は広がっているが、使用済み燃料
の後始末のことはよく分からないと
いう人は多い。「核のゴミ」をこれ以
上増やさず、国の地層処分政策を見
直し、よりましな対策を講じるため
の議論が必要だ。（つづく）

※筆者のHP「滝川康治の見聞録」takikawa.essay.jp/ に本シリーズの過去記事を収録しています。ご参照ください。

——泊原発から発生した使用済み核燃料をどうしたらいいか

「国や北電の責任で安全に管理を」

安全管理の徹底を求めたい

——泊原発の運転開始から20数年が経過し、すでに1326体の使用済み核燃料が発生しました。住民や行政はどう受け止めていますか。

牧野 北海道電力さんには、「運転中も停止中もきちんとした管理のなかでやってほしい」と要望し、体制を整えてもらっています。そうすることが行政機関の責務です。使用済み燃料について、住民から表立つての話はないですね。

——特に北電から住民に説明する機会もない、と。

牧野 「使用済み燃料も含めて」という言葉は、今までないですね。(住民に)理解されていないところもあるでしょうが、合計207万キロワットの出力で20年になり、事故もなかったから、そうした面の心配は

なかった。行政として(北電に)常に申しあげている、ということだけは付け加えさせていただきます。

——北電は、泊原発の再稼働を申請し、安全対策の工事をやっていますが、再稼働すると使用済み核燃料の保管量は更に増える。そうした事態を、どう受け止めますか。

牧野 保管場所の関係で将来、これ以上は受け入れられない、ということが出てくるでしょう。(泊は)ほかの原発に比べ保管容量に余裕があるけれど、それでいいわけではない、青森県六ヶ所村や外国の利用できるところを、きちんと確保しないとうまくいきません。再稼働の問題も含めて安全管理を徹底し、国や北電が早めに方向性を見いだせるような形にしていた方がいいと。

——六ヶ所再処理工場は竣工延期が20数回続き、本格稼働できる状況

にありません。六ヶ所の使用済み燃料保管施設は満杯に近い状態で、受け入れにも限界がある。そうした現状をどう受け止めますか。

牧野 そのデータは知り得ませんが、北電以外のサイトも含め、六ヶ所や外国の支援を受けなければ大変な時期が出てくる。国を挙げて、いろんなことを想定しながら対応しなければなりません。

近隣で保管するしかない…

——原発誘致自治体として使用済み燃料のお守りをしている訳ですが。

牧野 使用済み燃料であるのが原発であろうが、安全・安心な施設づくりをしてもらわなくてはなりません。北電に情報提供していただきながら、保管中のもの、これから増えるものの管理体制を常に整備しなければなりません。

——福島事故で使用済み燃料プールの水が失われ、原子炉より怖い事態になることが明らかになった。

牧野 そうならないように、保管ピットも原子炉と同様の対策を講じなければなりません。

——「あなたのところで核のゴミを受け入れてください」と言われても、村としては嫌なのでは？

牧野 原発が立地されている以外のところに「置かせてくれ」と言っても、賛成しないのではないかと思いますね。それは、近隣のなかでやるしかないんじゃないか。

——福井県知事は「使用済み燃料を県内に置いてもらっては困る」と知事会などと言っています。全国的に今後、立地地域と電力会社所在地などの軋轢が表面化するのは。

牧野 岩宇4町村が道とともに北電と安全協定を結んでいるので、それらと協議をしてクリアしなければならぬ。後志管内19市町村とも話をしたなかで進めなければいけません。「立地地域にあるから、そのままがいい」とはなりません。

「乾式貯蔵方式」でやるべき

——日本学術会議は今春、「発生し

有力な提案だと思えますが、政府は耳を傾けようとしません。立地自治体の方から問題提起すべきでは。

牧野 それは必要だと思えます。——そうしないと、消費地の自治体や市民も考えないのでは。

牧野 これは原発と同じ考え方で行かないといけないと思います。

——泊原発は、あと10数年で廃炉問題に直面します。廃炉後の村づくりに関しての考え方を。

牧野 村長に就任して2期8年になります。ハード面はやり尽くし、情報化や下水道・簡易水道の整備も終わり、維持管理体制の段階に入ってきました。泊村の第4次総合計画に定めた財政計画を立て、原発の40年(廃炉)を考えながら、大規模固定資産や電源立地交付金の財源が少なくなっていくことも計画に入れていきます。今後は積み立てをしながら、住民サービスを停滞しない形で福祉施策を進めたい。廃炉という言葉は好きではありませんが、当然出てくる問題です。使用済み燃料の関係は、国と協議し、減らしていく形を要望しながら進めていきたい。

——ありがとうございます。

(6月23日、泊村役場で収録)

使用済み燃料は50年間、乾式貯蔵で暫定保管を「保管場所は原発サイト以外で」などの提言を発表しました。どう受け止めますか。

牧野 全国原発立地市町村の協議会でもこの問題が提起され、貯蔵の仕方は乾式がいいのではないかと、という話がされています。

——乾式貯蔵の方向になった、と。
牧野 そうです。(貯蔵期間が)40年、50年という話もありますが、今後どうするか模索している状態です。安全に管理できる処理の仕方を第一条件にしながら、原発サイトであろうとサイト外であろうと、乾式貯蔵方式で進めるほうがいいと思う。

——原子力は百年先にも続いている技術ではありません。使用済み燃料や廃炉の廃棄物という「核のゴミ」が残ります。僕が泊村の住民なら、原発があった地域という理由で置かれ続けることには、「たくさん電気を使った地域じゃないのに、嫌だな」と思っています。そのあたりは正直どうお考えですか。

牧野 放射性を帯びる



(まきの・ひろみ)1946年、泊村生まれ。隣の岩内町で育ち、岩内高校を経て札幌短期大学卒業。電気関係の仕事に従事した後、73年に村役場入りして総務課長や副村長などを歴任。2008年、急死した前村長の後継として村長選に出馬し初当選。現在2期目。全国原子力発電所立地協議会の理事。

廃棄物が地元の環境のなかに保管されるのであれば、人間の考え方でして当然、「困ったもんだな」となる。原発を再稼働させ、再生可能でやるものについてエネルギー政策を進めていくなかで、これらの問題も解決していかなければならないと思います。その方向性を国全体で持たなければ、おっしゃるような「ゴミだけ残して、どうするんだ」となる。

——道民のなかには「泊村は原発の交付金で立派な公共施設を造った

りしている。いい思いをしたんだから、使用済み燃料も全部引き受けてもらいたい」という声がある。僕は乱暴な言い方だと思いますが。

牧野 岩宇4町村の足並みを揃えながら、道や国にも話して責任を

持つて対応しなければなりません。原発を誘致することで道も交付金を受けてきた訳で、「北海道全体でどうすべきか」という姿勢で関係町村が立ち上がらないと筋が通らない。

廃炉後に向けた村づくりは？

——廃炉作業も終わると関連の仕事もなくなり、人口も減っていく。この地域に使用済み燃料だけ残ると、嚴重な管理が必要であるにも関わらず、存在自体が忘れられてしまう。僕はむしろ、泊原発の使用済み燃料はここから近い石狩湾新港まで運び、陸送できる範囲で地上に暫定保管し、最終的にどうするか議論を深めるほうがいい、と考えています。

牧野 将来的な廃炉の後、取り残されて人口密度も少なくなり、管理する者がいなくなったときにどうするんだ、とならない形にしなければなりません。福島のような事故が起きたなかで生活をしている人たちと同じような形になる訳です。そうならないように、今から政府と話し合いをしながら解決していくと。「どんな解決策があるんだ？」と聞かれても即答できませんが…。

——学術会議の提案は、ひとつの